

令和 2 年 5 月 28 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04421

研究課題名(和文)高齢者を対象とした万引きの再犯防止プログラムの開発およびその効果の検証

研究課題名(英文)Development of a shoplifting prevention program for the elderly

研究代表者

大久保 智生 (Okubo, Tomoo)

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：30432777

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：研究成果としては、万引きGメンと呼ばれる店内保安員を対象としたPAC分析から、効果的な対応として高齢者の万引き犯の背景を考慮しながら、タイプによって対応を変えていく必要性が示唆された。精神科医を対象とした調査から、クレプトマニアの診断は難しく、ふりをしている人も多く、積極的に診断することには是非が問われていることが示唆され、教育プログラムの必要性も明らかとなった。店舗での実践研究から、店舗における高齢者への買い物支援の効果と声かけを中心とした店員教育の効果が示唆された。また、警察と連携して高齢者の万引き犯とその家族に配布するためのリーフレットを作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義や社会的意義としては、これまで考慮されてこなかった高齢者を含めた万引きの再犯防止に焦点を当て、その支援や教育に関する研究を行った点が挙げられる。特に、実際に万引き犯を捕捉するのは万引きGメンと呼ばれる店内保安員であり、窃盗癖なのかどうか診断するのは精神科医である。こうしたこれまでに焦点が当てられなかった対象に焦点を当て、効果的な支援や教育を検討した点にも学術的意義があるといえる。さらに、こうした研究や先行研究を踏まえ、警察と連携して捕捉された高齢者の万引き犯とその家族に配布するリーフレットを作成した本研究の試みは全国初のものであり、大きな社会的意義があるといえる。

研究成果の概要(英文)：As a result of the research, a PAC analysis of shoplifting G-men suggested that effective responses should be made to different types of shoplifting, taking into account the background of shoplifting among the elderly. A survey of psychiatrists suggests that kleptomania is difficult to diagnose, that many people pretend to have it, that it is a matter of right or wrong to proactively diagnose it, and that there is a need for educational programs. A practical study in a store suggested the effectiveness of shopping assistance to the elderly in the store and the effectiveness of store clerk education focusing on speaking to them. In addition, leaflets have been produced for distribution to elderly shoplifters and their families in conjunction with the police.

Translated with www.DeepL.com/Translator (free version)

研究分野：犯罪心理学

キーワード：万引き 高齢者 再犯防止 クレプトマニア

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、全国的に万引き犯罪が大きな社会問題となってきた。特に高齢者の万引き犯罪の増加は顕著であり、有効な対策が求められている。さらに、全国における年間の万引き被害額は4500億以上と試算されているものの、その被害額に合った対策が取られていないのが現状である。万引きに関する先行研究は、日本でも海外でもあまり注意を払われてこなかったため(大久保・堀江・松浦・松永・江村・永富・時岡, 2012; Krasnovsky & Lane, 1998)、数が多いとはいえない。しかし、万引き犯罪の被害は近年深刻になり、社会問題化してきていることから、被疑者や一般の大学生や中学生を対象とした研究(永岡, 2003; 皿谷・三阪・濱本・平, 2011; 上野・中村・本多・麦島, 2009; 全国万引犯罪防止機構, 2010)が行われるようになってきたが、高齢者を対象とした研究は少ないのが現状である。

高齢者の万引きに関する研究では、香川県において、高齢者を含む被疑者を対象とした調査(大久保・堀江・松浦・松永・江村, 2013; 大久保・堀江・松浦・松永・江村・永富・時岡, 2012)、一般の高齢者を対象とした調査(宮前・堀江・松永・宮前・大久保, 2012; 大久保・堀江・松永・松浦・宮前・宮前・岡田・七條, 2012; 大久保・石岡, 2016)などが行われている。また、香川県において、大久保ら(大久保・時岡・岡田, 2013)は警察と連携して、一般の高齢者に対する万引き防止教育プログラムを実践し、その効果を検証している。しかし、これらの研究は、高齢者の万引きの予防のための研究であり、万引きを行う高齢者の支援や教育についてはこれまで十分に研究を行ってこなかった(大久保, 2014)。近年の高齢者の万引きの現状を勘案すると、繰り返し万引きを行う高齢者が大幅に増加してきていることから、高齢者の万引き犯の特徴や効果的な対応を詳細に把握する必要があるといえる。

また、こうした万引きを繰り返し犯す高齢者の中には窃盗癖(クレプトマニア)とよばれる者が一定数存在していることが指摘されている(Goldman, 1991)。近年、精神医学の領域では、多くの症例が報告されるなど、関心が集まってきている(河本, 2012; 小島, 2005; 斉藤, 2010)。特に、若者よりも高齢者の窃盗癖が問題になっていることから、窃盗癖(クレプトマニア)と呼ばれる万引き再犯者に焦点を当て、万引き再犯者がどのような困難を抱え、どのような支援や教育を求めているのかについて検討する。

さらに、万引き再犯者のためのプログラムがない(林, 2010)ことから、高齢者向けの万引きの再犯防止プログラムを開発することとする。特に、高齢者の万引きの再犯防止を考える上では声かけが有効であり、高齢者の万引きには社会的孤立が大きな要因となっている(大久保・時岡・岡田, 2013)ことから、地域や家族につながるようなアプローチが重要である。したがって、店舗における高齢者への買い物支援の効果と声かけを中心とした店員教育の効果を明らかにし、警察と連携して高齢者の万引き犯とその家族に配布するためのリーフレットを作成する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近年増加する高齢者の万引きの特徴を明らかにした上で、窃盗癖も含む再犯を繰り返す高齢者への効果的な支援を検討し、高齢者向けの万引きの再犯防止プログラムを開発し、その効果を検証することである。

具体的には、2017年度は高齢者の万引き犯への効果的な対応について、PAC分析を用いて検討する。2018年度は万引き再犯者への効果的な支援について、精神科医を対象としたアンケート調査を用いて検討する。2019年度は高齢者の再犯防止を視野に入れた店舗における買い物支援の効果と声かけを中心とした店員教育の効果を検討し、さらに、高齢者の万引き犯とその家族を対象としたリーフレットを作成する。

3. 研究の方法

(1) 2017年度の研究の方法

高齢者の万引き犯への対応の検討：店内保安員を対象としたPAC分析から

調査対象者：調査対象者は、万引きGメンと呼ばれる店内保安員1名(以下、調査対象者A)である。なお、調査対象者は、約5000人を捕捉してきた男性のベテランの店内保安員である。

提示刺激：提示刺激として、「あなたにとって、高齢者の万引き犯への対応がうまい万引きGメンとはどのような人でしょうか。その万引きGメンは高齢者の万引き犯に対してどんな振る舞いをすると思いますか。それから、その万引きGメンはどんなことを考えていると思いますか。頭に浮かんできたキーワードやイメージを、思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入して下さい。」と印刷された文章を提示し、口頭で読みあげて教示を行った。

手続き：教示の後、白紙のカードを40枚程度調査対象者の前に置き、頭に浮かばなくなるまで自由連想させ、記入させた。この後、調査対象者にとって重要と感ぜられる順に記入したカードを並べ換えさせた。次に、項目間の類似度距離行列を作成するために、ランダムに2つずつペアにして提示し、以下の教示と7段階の評定尺度に基づいて、類似度を評定させた。類似度の評定についての教示は、「あなたが高齢者の万引き犯への対応に関連するものとしてあげたキーワードやイメージの組み合わせが、言葉の意味ではなく、直感的イメージの上でどのくらい似ているかを判断し、その近さを下記の尺度の該当する記号で答えて下さい。」という教示と評定尺度が印刷された用紙を調査対象者に提示し、口頭で読みあげて行った。なお、評定尺度は7件法である。類似度評定の後で、調査対象者別にクラスター分析(ウォード法)を行った。その後の調査対象者による解釈の方法は全て内藤(1997)に倣った。

(2) 2018 年度の研究方法

万引き再犯者への効果的な支援の検討：精神科医を対象としたアンケート調査から

調査対象者：精神科医 63 名（男性 59 名、女性 4 名）

調査内容：クレプトマニアの診断の経験：クレプトマニアの診断の経験の有無について回答を求めた。クレプトマニアに対する認識：大久保・吉井（2015, 2016, 2017）を参考に「クレプトマニアの診断は難しいと思うか」、「DSM-5 の基準を緩和して、積極的にクレプトマニアの診断をしていくことについてどう思うか」、「クレプトマニアの診断がつくと減刑されることを知っているか」、「クレプトマニアのふりをしている人がいると思うか」、「クレプトマニアの診断をしてほしいと頼まれたことはあるか」、「クレプトマニアは責任能力があると思うか」、「クレプトマニアは更生可能だと思うか」、「教育プログラムが必要であると思うか」のそれぞれに対して、4 件法で回答を求めた。

(3) 2019 年度の研究方法

店舗における買い物支援の効果の検証

参加者：大学生 16 名が買い物支援に参加した。

手続き：大学生には買い物支援の実施前に、万引き防止コンサルタントによる店舗での防犯対策に関する講義と社会福祉協議会による認知症サポーター講座の計 180 分を受講してもらった。講義を受講してもらった後に、高齢者の防犯の意味も込めた声かけによる買い物支援を 2 店舗で 2 日間行った。買い物支援では、万引き対策で最も重要な寂寥感の解消になるように、1 人で買い物に来た高齢者に声かけを行い、買い物を手伝いながら、話すという活動を行った。

効果検証のための調査内容：効果検証のための調査内容としては、(1) 防犯意識、(2) 買い物支援が必要な人、(3) 買い物支援の効果的な方法、(4) 買い物支援の効果について尋ねた。(1) 防犯意識については買い物支援の前後で尋ね、(2) 買い物支援が必要な人、(3) 買い物支援の効果的な方法、(4) 買い物支援の効果については、買い物支援後に自由記述で尋ねた。

店舗における声かけを中心した店員教育の効果の検証

参加者：6 店舗の役職者 11 名と店員計 51 名は各店舗で万引き防止講習会に参加した。

手続き：店員教育の内容としては、まず、万引き防止コンサルタントが万引きの手法や挙動の説明と店のレイアウトの課題やホットスポットの指摘を行った。次に、教育心理学を専門とする研究者が防犯意識とホスピタリティの重要性と未然防止のための声かけと挨拶の意義の説明を行った。その後、犯罪心理学を専門とする研究者が犯罪機会論による声かけや挨拶の重要性の説明とロールプレイを実施した。

効果検証のための調査内容：効果検証のための調査内容としては、(1) 防犯意識と(2) ホスピタリティについて、万引き防止講習会の前後で尋ねた。

4. 研究成果

(1) 2017 年度の研究成果

高齢者の万引き犯への対応の検討：店内保安員を対象とした PAC 分析から

調査対象者の連想項目およびクラスター分析の結果をもとにクラスターの数の決定と解釈を行った。

クラスターの解釈：クラスター1は「説諭で再犯防止」から「人と接するのが好き」までの4項目であり、説諭による再犯防止と解釈した。クラスター2は「捕まえるのは容易」から「話し好きで論しが上手い人」までの7項目であり、貧困と孤独による万引きの絶望と解釈した。クラスター3は「これで最後にしましょう」から「話を聞いたうえで励ますことができる」までの4項目であり、保安員の虚無感と解釈した。クラスター4は「恥ずべき行為だし、たくさんの人に迷惑をかけている」から「一緒に悲しむ」までの4項目であり、罪に向き合うためのきっかけ作りと解釈した。

クラスターの共通点と相違点：クラスター1と2の共通点は周囲の人間関係が重要であるということであり、違いは2は説諭が通じないことと解釈された。クラスター1と3の共通点は説諭で、社会的認知を高めたいということであり、違いはクラスター3が保安員という立場の説諭が評価されない失望と解釈された。クラスター1と4の共通点は教育の必要性であり、違いはクラスター4が理想ではなく現実と解釈された。クラスター2と3の共通点は評価を求めていることであり、違いはクラスター3が失望や怒りと解釈された。クラスター2と4の共通点は情の部分であり、クラスター2は応援してくれる人がいないことと解釈された。クラスター3と4の共通点は相手の立場に立って寄り添うことであり、違いはクラスター3の方が伝わっていないことと解釈された。

全体のまとめ：高齢者の万引き犯の背景を気にしつつ、万引き犯を信頼して、励まし、タイプによって対応を変えていくことが解釈された。

(2) 2018 年度の研究成果

万引き再犯者への効果的な支援の検討：精神科医を対象としたアンケート調査から

精神科医のクレプトマニアの診断の経験とクレプトマニアに対する認識について、検討を行った。

クレプトマニアの診断の経験の検討：クレプトマニアの診断の経験の回答の割合を算出した結果、診断の経験をしたことがある精神科医は約7割いることが示された。レンジは1~100と経験にばらつきがあることが示された。

クレプトマニアに対する認識の検討：クレプトマニアに対する認識の回答の割合を算出した結果、クレプトマニアの診断は難しいと思っている精神科医が約 8 割いることが示された。また、DSM-5 の基準を緩和して、積極的にクレプトマニアの診断をしていくことについてしたほうがいいと思う精神科医としないほうがいいと思う精神科医がほぼ半々であることが示された。クレプトマニアの診断がつくと減刑されることを知っている精神科医が約 6 割いることが示された。クレプトマニアのふりをしている人がいると思う精神科医が約 8 割いることが示された。クレプトマニアの診断をしてほしいと頼まれたことがある精神科医は約 2 割いることが示された。クレプトマニアは責任能力があると思う精神科医は約 9 割いることが示された。クレプトマニアは更生可能だと思う精神科医は約 6 割いることが示された教育プログラムが必要であると思う精神科医は約 9 割いることが示された。以上の結果から、クレプトマニアの診断は難しく、積極的に診断することには是非が問われていることが示唆された。また、保安員や弁護士を対象とした調査と同様にふりをしている人がいることも示唆された。また、責任能力があるといえ、教育プログラムの必要性も明らかとなった。

(3) 2019 年度の研究成果

店舗における買い物支援の効果の検証

買い物支援に参加した大学生の防犯意識の変化と自由記述について検討を行った。

防犯意識の変化の検討：買い物支援を行った大学生の防犯意識の変化を検討するため、買い物支援前後の防犯意識について t 検定を行った。その結果、外での防犯対策($t(15) = 2.522, p < .05$)と合計得点($t(13) = 2.394, p < .05$)において、買い物支援後の得点有意に高いことが示された。以上の結果から、買い物支援によって大学生の防犯意識が向上することが明らかとなった。

自由記述の検討：「買い物支援が必要な人」について検討するため、カテゴリー分類を行った結果、4つのカテゴリーが抽出された。「高齢者」が 52.5%と最も多く、「子ども連れ」が 20.0%、「社会的孤立」が 17.5%の順に多いことが示された。「買い物支援の効果的な方法」について検討するため、カテゴリー分類を行った結果、4つのカテゴリーが抽出された。「話し相手」が 50.0%と最も多く、「不信感の払拭」が 36.7%、「負担や困っていることの解消」が 10.0%の順に多いことが示された。「買い物支援の効果」について検討するため、カテゴリー分類を行った結果、6つのカテゴリーが抽出された。「孤独感の解消」が 40.7%と最も多く、「買い物時の楽しみ」が 14.8%、「地域の一体感」が 14.8%、「お店/店員の変化」が 11.1%、「万引き防止」が 11.1%、「負担の軽減」が 7.4%の順に多いことが示された。以上の結果から、大学生は買い物支援の対象としては、主に高齢者を考えており、買い物支援の効果的な方法としては、主に話し相手となることを考えており、買い物支援の効果としては、主に孤独感の解消を考えていることが明らかとなった。

店舗における声かけを中心とした店員教育の効果

店員の防犯意識とホスピタリティの変化について検討を行い、防犯意識とホスピタリティの関連の検討を行った

防犯意識の変化の検討：店員の防犯意識の変化について検討するため、t 検定を行った。その結果、「店内や対応への注意」($t(42) = 2.603, p < .05$)では、事後のほうが事前よりも得点が高かった。したがって、講習会による防犯意識の「店内や対応への注意」の向上が示された。

ホスピタリティの変化の検討：店員のホスピタリティの変化について検討するため、t 検定を行った。その結果、「サービス提供力」($t(45) = 2.658, p < .05$)、「歓待」($t(45) = 2.504, p < .05$)、「顧客理解力」($t(46) = 2.449, p < .05$)、「誠実」($t(46) = 1.964, p < .1$)では、事後のほうが事前よりも得点が高かった。したがって、万引き防止講習会によるホスピタリティの向上が示された。

防犯意識とホスピタリティの関連の検討：店員の防犯意識とホスピタリティの関連について検討するため、事前と事後ごとに防犯意識とホスピタリティとの相関係数を算出した。その結果、事前では、防犯意識の「店内や対応への注意」はホスピタリティの「サービス提供力」($r = .666, p < .001$)、「歓待」($r = .531, p < .001$)、「顧客理解力」($r = .593, p < .001$)、「外見と謙虚」($r = .403, p < .01$)、「誠実」($r = .484, p < .001$)と正の関連が認められた。防犯意識の「連携や情報への関心」はホスピタリティの「サービス提供力」($r = .598, p < .001$)、「歓待」($r = .481, p < .001$)、「顧客理解力」($r = .529, p < .001$)、「外見と謙虚」($r = .508, p < .01$)、「誠実」($r = .533, p < .001$)と正の関連が認められた。防犯意識の「油断や隙の無さ」はホスピタリティの「歓待」($r = -.271, p < .05$)と負の関連が認められた。事後では、防犯意識の「店内や対応への注意」はホスピタリティの「サービス提供力」($r = .656, p < .001$)、「歓待」($r = .540, p < .001$)、「顧客理解力」($r = .608, p < .001$)、「外見と謙虚」($r = .332, p < .05$)、「誠実」($r = .578, p < .001$)と正の関連が認められた。防犯意識の「連携や情報への関心」はホスピタリティの「サービス提供力」($r = .462, p < .01$)、「歓待」($r = .502, p < .001$)、「顧客理解力」($r = .527, p < .001$)、「外見と謙虚」($r = .445, p < .01$)、「誠実」($r = .574, p < .001$)と正の関連が認められた。以上の結果から、事前も事後も防犯意識とホスピタリティがつながっていることが明らかとなった。

高齢者の万引き犯とその家族を対象としたリーフレットの作成

警察と連携して高齢者の万引き犯とその家族に配布するためのリーフレットを作成した。作成したリーフレットは、先行研究の結果を踏まえて、万引きについて正しい知識を獲得し、タイプごとの方向性を示し、地域や家族につながるような内容で構成した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 大久保智生・皿谷陽子・西本佳代・吉井匡・高山朝陽・田中晶・高島知之・小野坂裕美・吉見晃裕	4. 巻 17
2. 論文標題 大学生による店舗での買い物支援とその教育効果：主題C「地域での防犯を考える」での実践	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 香川大学教育研究	6. 最初と最後の頁 121-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大久保智生・皿谷陽子・尾崎祐士・田中晶・高島知之・小野坂裕美・吉見晃裕	4. 巻 25
2. 論文標題 安全安心まちづくり推進店舗における万引き防止教育の実践：店員の防犯意識とホスピタリティの向上に注目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 香川大学生涯学習教育研究センター研究報告	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大久保智生	4. 巻 3
2. 論文標題 店内保安員における高齢者の万引きへの対応に関するPAC分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 PAC分析研究	6. 最初と最後の頁 24-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大久保智生	4. 巻 70
2. 論文標題 子どもの万引きはどのようにとらえられるのか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 更生保護	6. 最初と最後の頁 16-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 大久保智生・吉井匡
2. 発表標題 万引きを繰り返すことはどのようにとらえられるのか（5）：これまでの調査の比較から
3. 学会等名 法と心理学会第20回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大久保智生・吉井匡
2. 発表標題 万引きを繰り返すことはどのようにとらえられるのか（4） 精神科医を対象とした調査から
3. 学会等名 法と心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tomoo OKUBO
2. 発表標題 The characteristics of shoplifting suspects in different age groups
3. 学会等名 18th European Conference on Developmental Psychology（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考